

NPO法人日本ベラルーシ友好協会は、今夏県内の子ども20人をベラルーシに派遣する。二十日まで参加者を募っている。

同じ原発事故の被災地での交流などを通じて、国際的視野を広げ

ベラルーシに今夏 本県の子ども派遣

友好協 20日まで参加募る

とを目的として、陸料など二万円。交通費、食費などはベラルーシ政府が負担する。八月九日までの日程で、在秋田ベラルーシ共和国名誉領事の佐々木正光さんらが同行する。問い合わせは同協会。電話011-8006006

27年前のチェルノブイリ原発事故で放射能被害に遭ったベラルーシの政府が7月、原発事故で被災した福島の子どもたちを、同国の保養プログラムに招待する。日本ベラルーシ友好協会(秋田)の訪問団派遣事業の一環。

旧ソ連のベラルーシでは原発事故の5年後から、汚染地域に住む子どもを対象に、国が費用を負担する形で保養プログラムを実施している。国内50カ所に温水プールの敷設などを完備した「サナトリウム」を築かれた保養施設があり、子どもたちが2〜4カ月間滞在する。

ベラルーシが保養プログラム

夏休みに11泊、子供たちを招待

今回の訪問は、7月29日〜8月9日の11泊12日の日程で、参加者はスポーツイベントに参加したり、文化施設を訪問したりする。また、現地で保養中の子どもたちと交流して、放射能被害について、国際理解を深めてもらう。

対象は小学生から16歳未満で定員25人。費用は海外保険などがかる2万円のみで、それ以外は全てベラルーシ政府が負担する。両親の同意、一人旅が可能なことが条件で、締め切りは4月20日。問い合わせは同協会事務局・小松さん(0111-8006006)へ。

文化交流の感想発表

ベラルーシに保養派遣された本県の小、中、高校生約30名が、秋田県山形市で開かれた、感想発表会で同国の文化や人々の暮らしについて、貴重な体験を語り交わった。

保養派遣先同国での滞在は、県民の10〜16歳の子どもたち12人が参加した。

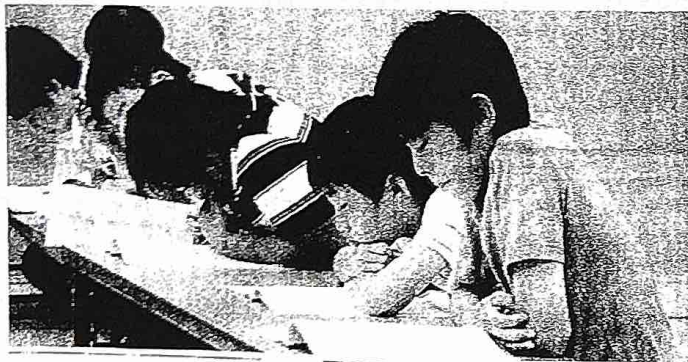
7月28日から30日、秋田県山形市で開かれた「文化交流・国際理解推進協議会」でも、感想発表会が行われた。

ベラルーシ派遣の子どもたち

「ズプリョク」に滞在した。健康検査を行ったほか、現地の子どもたちとの交流会で参加し、観光施設などを訪問した。

子どもたちは「福島へベラルーシは距離が近くても、多くの子どもたちが訪れてくれた」「ベラルーシの子どもは活気があふれる。明るく町を回遊して復興の励みになった。」など感想を述べた。

ベラルーシでの体験を振り返る子どもたち



ベラルーシ 県内の子ども25人招待へ

ベラルーシ共和国は今夏、東京電力福島第一原発事故で被災した県内の小学生から16歳未満の子どもたち25人を同国に招待する。

東北6県を管轄する在秋田ベラルーシ共和国名誉領事館の開設などを記念し、原発事故の被災者支援の一環として日本ベラルーシ友好協会と共同で実施する。

期間は7月29日〜8月9日。同国の国立リハビリセンターなどに宿泊。同国で実施する子ども向けの健康プログラムを体験するほか、文化に触れる活動などを予定する。

健康プログラムを通じて、現地の子どもたちとも交流する。

同友好協会関係者が同行。費用は同国が負担するが、保険費用などとして2万円が必要。申し込み締め切りは20日。定員は25名。問い合わせは、日本ベラルーシ友好協会(電話011-8006006)へ。